



Title	意味論から見た「幸せ」
Author(s)	坂場, 大道
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76978
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

意味論から見た「幸せ」

坂場 大道

1. はじめに

「幸せ（幸福）」とは何か。どのような生き方をすれば、「幸せ」になれるのか。このような問題は、主に哲学や社会学において議論されてきた。近年では、国の成長を測るための手段として、経済的指標の代わりに「主観的幸福度」が用いられるほど、「幸せ」への関心は高まりつつある。他方、管見の限り、言語学の観点から「幸せ」という語の意味を詳細に分析したものは、ほとんどない。しかし、「幸せ」という語の意味を明らかにしないまま、「幸せ」について議論することはできるのだろうか。

一般的に、「幸せ」という語は「太郎は幸せだ」のように、ナ形容詞（いわゆる形容動詞）として用いられる。本研究は「幸せだ」という語の生起環境を観察し、その意味を分析する。特に、類似した意味を持つ日本語の感情形容詞「嬉しい」「楽しい」、および英語 happy との比較から、その違いを明らかにする。最終的に、「幸せ」と happy という語の意味の違いが、国ごとの幸福度の比較に与える示唆についても考察する。

2. 先行研究

「幸せ」という語の意味を扱う言語学の先行研究は、極めて少ない。本稿では、菊地（2000）による、「嬉しい」「楽しい」との比較に基づいた「幸せだ」の意味分析、および西尾（1972）による、人称制限との関連で言及されている部分を取り上げる。

第一に、菊地（2000）の主な考察対象は、「嬉しい」と「楽しい」の違いである。菊地によると、(1a) は「心の動き」を示し、自分を直接に益する、実現しにくいことの発生によって触発される一時的な状態を表す「嬉しい」が用いられる。他方、(1b) は「時間の過ごし方」を示し、長期的な状態を表す「楽しい」が用いられる。

- (1) a. 贈り物を {ウレシク / * タノシク} 頂戴する
b. 子供と {タノシク / * ウレシク} 遊ぶ。 (山田 1982: 115)

「嬉しい」と「楽しい」との比較に基づいた「幸せだ」の意味は、以下の通りである。

- (2) 心の一時的 / 長期的な状態を述べる語で、《触発》を必要とせず、幸福感によつて 〈直接的・積極的ないいこと〉 でなくともよく 〈それほどは実現しやすくないこと〉 でなくともよい。 (菊地 2000: 157-8)

上記は、あくまで菊地が「嬉しい」「楽しい」の区別に用いた条件（一時的 / 長期的、触発の有無）が該当しないことを述べたに過ぎず、積極的に「幸せだ」の意味を定義したも

のではない。従って、「幸せだ」という語によって表される意味や、「嬉しい」「楽しい」の代わりに「幸せだ」が用いられる動機については、不明である。

第二に、西尾（1972）は、人称制限との関連で「幸せだ」の意味に言及している。英語などの言語とは異なり、日本語の感情形容詞は、非過去形・言い切りの述語として用いられる場合、1人称のみを主語に取るとされる。以下の文では、感情形容詞「嬉しい」「悲しい」の主語として、1人称以外を用いた文は容認されない。¹

- (3) a. 私は {嬉しい / 悲しい}
b. * あなたは {嬉しい / 悲しい}
c. * 太郎は {嬉しい / 悲しい}

上記の人称制限に対しては、「感情形容詞の意味が主観的であるため、自分以外の感情は表せない」（西尾 1972）、日本語は「主観的把握」を好む（池上 2011）という説明が試みられてきた。他方、これらの説明では、以下のように、同じ感情形容詞に分類される「幸せだ」が、その主語に3人称を取れる理由を説明できない。

- (4) {私は / 太郎は} 幸せだ。

(4) の容認性は、人称制限がすべての感情形容詞に等しく適用されるのではなく、それぞれの語彙によって制限が異なる²可能性を示す。多くの先行研究は、上記のような人称制限を受けない感情形容詞に言及はないが、西尾（1972）は、以下のように簡潔に述べる。

- (5) 「しあわせな」「悲観的な」「内気な」などは客観的な性質であるから、ある人がその性質をもっているかどうかが論争の種になり得る。しかし、「うれしい」「かなしい」「はずかしい」などの主観的な感情は、そういうことが普通には存在しないと思われる。 (西尾 1972: 28)

西尾は、「幸せだ」が人称制限を受けない理由を、その「客観的な性質」に帰している。しかし、「幸せだ」が「客観的な性質」であるということが、他の感情形容詞と比べて、どのような意味的特徴を持つということについては、説明されていない。

¹(3) は、話者が他人の感情を直接把握可能となる小説の文や、話者が自分自身を「太郎」と呼んでいる場合において、容認されることに注意されたい。

² 基本的に感情表現は、形容詞が1人称、動詞が3人称を主語にする、という寺村（1982）の主張に対し、長野（1995）はそれぞれの動詞による違いを考察する必要性を論じている。「幸せだ」が人称制限を受けないことから、形容詞についても、それぞれの違いを考察する必要があると考えられる。

これらの先行研究の問題点から、本研究では「幸せだ」の語の生起環境を観察することで、その意味を詳細に分析し、定義を試みる。一般に、感情語彙は抽象度が高い概念であるため、明確に定義するのが困難とされる。本稿は、Natural Semantic Metalanguage (NSM)理論を分析手法として採用することで、感情語彙の明確な定義を試みる。

3. 分析枠組み

Natural Semantic Metalanguage (NSM) とは、Wierzbicka (1972) によって提唱された、意味を扱う分析枠組みである。「複雑な語の意味は、それよりも簡単な語で説明されなければならない」という考えを背景に、それよりも簡単な概念には分解できない、最も基本的な意味を持つ概念の存在を想定する。これらの意味元素は semantic primes と呼ばれ、ある概念をこの意味元素に還元することで、その意味の記述を試みる。今までに行われた 30 以上の言語の調査から、これらの意味元素は、すべての言語に存在する概念と考えられている。

以下の表 1 は、2020 年現在で最新の、英語版³の semantic primes のリストである。大文字で表記された約 65 個の意味元素が、左側に示すグループに分類されている。

Substantives:	I~ME, YOU, SOMEONE, SOMETHING~THING, PEOPLE, BODY
Relational substantives:	KIND, PARTS
Determiners:	THIS, THE SAME, OTHER~ELSE
Quantifiers:	ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH~MANY, LITTLE~FEW
Evaluators:	GOOD, BAD
Descriptors:	BIG, SMALL
Mental predicates:	KNOW, THINK, WANT, DON'T WANT, FEEL, SEE, HEAR
Speech:	SAY, WORDS, TRUE
Actions, events, movement, contact:	DO, HAPPEN, MOVE, TOUCH
Location, existence, specification:	BE (SOMEWHERE), THERE IS, BE (SOMEONE)'S, BE (SOMEONE / SOMETHING)
Life and death:	LIVE, DIE
Time:	WHEN~TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME, MOMENT
Space:	WHERE~PLACE, HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE
Logical concepts:	NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF
Intensifier, augmentor:	VERY, MORE
Similarity:	LIKE~WAY~AS

(表 1. Semantic primes 一覧 Goddard and Wierzbicka 2014)

表 1 に記載されている意味元素の組み合わせ方には、制限がある。例えば FEEL の場合は、以下のような組み合わせが許される。

³ NSM は、他にもフランス語やロシア語、日本語など、全部で 30 以上の言語で展開されている。本稿では、英語の NSM を用いた他の先行研究との比較を可能にするため、英語版を採用する。

- (6) someone FEELS something (good / bad)
someone FEELS like this

また本研究は、近年 NSM 理論に導入された、semantic templates という概念を用いる。Goddard (2018) によると、類似した意味を持つ語の定義は、共通した概念構造を持ってい。semantic templates とは、その共通した概念構造を定義に反映させるためのものである。以下は、英語の感情形容詞をコピュラと共に用いた場合の semantic templates である。

- (7) *Semantic template for English emotion adjectives with verb 'to be';*
Someone X was happy, angry, sad, ... (at this time)
- a. this someone thought like this at this time:
 - b. “_____”
 - c. _____”
 - d. because of this, this someone felt something (very) good / bad
like people often feel when they think like this
- (Goddard 2018: 72)

上記のテンプレートは「感情の概念構造は、スクリプトやシナリオである」とする Lakoff and Kövecses (1987) や Wierzbicka (1999) の考えに沿うものである。すなわち、誰かがある感情の状態にあるということは、その感情主体が引用符内に示すことを考えており、その結果として、その思考内容に通常結びついた感情を経験する。

Goddard (2018) によると、英語における感情を表す表現は一律にこの型を持ち、引用符の内容や、結果として感じるものが肯定か否定 (good / bad) か、その程度 (very の有無) 等において、それぞれの感情は異なる。本研究はこれを日本語の感情形容詞にも応用し、それに基づいた定義を提示することで、英語の感情表現の定義との比較を可能にする。

次節では、「幸せだ」の生起環境を観察することで、その意味を考察する。特に、「嬉しい」「楽しい」および英語 happy との違いから、その特徴を明らかにする。

4. 「幸せだ」の意味分析

本節では、「幸せだ」の語の意味として、2 つの大きな特徴を指摘する。4.1 では、「嬉しい」「楽しい」とは異なり、ある特定の事態や対象への反応ではなく、自身の状況に対する一般的な評価であることを示す。4.2 では、一般的な評価である点では英語 happy と共通するものの、(I) 自分の意図通りに事態が進行しているか、(II) 肯定感の強さとそれに伴う満足度、の 2 点において異なることを示す。4.3 では、これらの違いに基づく「幸せだ」の定義を提示する。加えて、「幸せだ」と happy の定義との比較から得られる、国ごとの幸福度の比較に与える示唆について考察する。

4.1. 「嬉しい」「楽しい」との違い

一般的に、ある人が「嬉しい」または「楽しい」状態にある時は、その人の感情を引き起こす事態の発生が想定される。(8) の容認性の違いは、「嬉しい」では、ある事態が「起きた」ことが想定される一方、「楽しい」では、ある事態が「起きている」ことが想定されることを示す。対照的に、(9) の「幸せだ」は、特定の事態の発生を喚起しない。

- (8) a. 嬉しそうだね。{何かあったの / ?? 何してるの}。
b. 楽しそうだね。{何してるの / ?? 何かあったの}。

- (9) 幸せそうだね。{? 何かあったの / ?? 何してるの}。

これに関連して、「嬉しい」「楽しい」は、感情を抱く特定の対象をガ格で取れる。(10) では、「サプライズ」「車の運転」という感情を抱く対象が、それぞれガ格で表されている。他方、(11) で示されるように、「幸せだ」は、感情の対象をガ格で取らない。

- (10) a. 私はサプライズが嬉しい
b. 私は車の運転が楽しい
- (11) a. 私は幸せだ
b. ?? 私は{サプライズ / 車の運転}が幸せだ

上記の「嬉しい」「楽しい」と「幸せだ」の文法的振る舞いの違いが示すように、「嬉しい」「楽しい」とは異なり、「幸せだ」は特定の事態や対象に対する反応ではない。

代わりに、「幸せだ」は自身の状況に対する一般的な評価を示す。すなわち、「幸せだ」の感情主体は、目の前の事態に反応しているというよりも、俯瞰的に自分の状況を判断している。この「幸せだ」の意味的特徴は、英語 *happy* が「嬉しい」「楽しい」のどちらにも日本語訳できない場合を考察することで確認される。

以下のように、肯定的感情を表す英語表現の中でも使用頻度の高い *happy* は、日本語でも同様に使用頻度の高い、「嬉しい」「楽しい」のいずれかに和訳されうる。

- (12) a. I'm so happy that we won the baseball game.
野球の試合に勝って{嬉しい / * 楽しい}
b. I'm the happiest when I'm with Taro.
私は太郎という時が一番{楽しい / ?? 嬉しい}

他方、*happy* は「嬉しい」「楽しい」のいずれにも翻訳されない場合がある。(13a) は、冒頭で触れた「主観的幸福度」の測定によく用いられる質問 (cf. Layard 2005)、(13b) は「幸せなら手をたたこう」というよく知られた歌の曲名である。

- (13) a. Taking all things together, would you say you are very happy, quite happy, or not very happy?

すべてを考慮すると、あなたはどれくらい {幸せ/*嬉しい/*楽しい} ですか

- b. If You're Happy and You Know It

{幸せ/*嬉しい/*楽しい} なら手をたたこう

(13ab) における *happy* は現在の「自身の状況に対する一般的な評価」を表すため、特定の事態の発生を想定する「嬉しい」「楽しい」は適切な訳として機能しない。「幸せ」を用いた方が、原文が意図する意味をより正確に伝達できることから、*happy* と同様に「幸せだ」も、「自身の状況に対する一般的な評価」を表すと考えられる。自分の置かれた状況をより俯瞰的に観察している点において「幸せだ」は、「嬉しい」「楽しい」よりも客観性が高く、「客観的性質」を持つとする西尾 (1972) の主張とも符合する。

日本語の形容詞は、意味の観点から、客観的な性質や状態を表す「属性形容詞」と、主観的な人の感情を表す「感情形容詞」の 2 つに大別される (西尾 1972)。両者の大きな違いの一つが、後者にのみ、主体の人称制限があるということである。人の感情を表すにも関わらず人称制限を受けない、客観的側面を持つ「幸せだ」は、典型的な「感情形容詞」というよりも、「属性形容詞」的側面を兼ね備えた語であると言える。

4.2 *happy* との違い

本節では、「幸せだ」の一般的評価の側面は *happy* と共通するものの、(I) 自分の意図通りに事態が進行しているか、(II) 肯定感の強さとそれに伴う満足度、の 2 点において *happy* と異なることを示す。

以下は、Goddard (2018) によって提示された、Goddard and Wierzbicka (2014) の分析に基づく最新の *happy* の定義である。

- (14) ***He was happy (at that time):***

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “many good things are happening to me now as I want
- c. I can do many good things now as I want
- d. this is good”
- e. because of this, this someone felt something good

like people often feel when they think like this (Goddard 2018: 85) (下線は筆者)

happy の感情主体は、自身の置かれた状況を「今、多くの良いことが自分に起こっている」と捉え (=下線部を除いた b)、それを肯定的に評価 (= d) している。happy のこれらの一般的評価の側面は「幸せだ」と共通するが、それ以外の意味要素において異なる。

第一に、(14) の 2 つの下線部 *as I want* が示すように、happy の感情主体は、自分の意図した通りに事態が運んでいると捉え、「今なら自分の思い通りに多くの良いことができる」 (= c) という感覚を伴う。Goddard and Wierzbicka (2014) によると、この点において happy は freedom という概念と強い相関性がある。メタファーの観点から happiness を考察する Kövecses (1991) も、その結びつきに関して、以下のように述べている。

(15) It seems intuitively correct to believe that the connection between freedom and happiness is that freedom is one possible source of happiness. In our simplified view of the world, we have the belief that “when we are free, we are happy.” (Kövecses 1991: 31)

他方、日本語の「幸せだ」は、happy ほど、freedom と強い相関性がないと考えられる。この意味的特徴は、「幸せだ」から happy への翻訳可能性を検討することで確認される。「幸せだ」は happy に翻訳されるものの、以下のような、自分の意図とは無関係に発生する事柄に対する「幸せだ」は、happy と訳すと不適切となる。

(16) a. あんな理解のある奥さんがいて君は本当に幸せだ。

You are very lucky to have such an understanding wife. (オーレックス英和辞典)

b. よい友人があつて幸せだ。

He is fortunate to have [in having] good friends. (プログレッシブ和英中辞典)

結婚相手や友人を選択する余地はあるが、「理解のある奥さん」や「よい友人」に出会うには、幸運も必要である。これらは自分の制御可能な範囲を超えていため、辞書の英訳としても happy ではなく、lucky や fortunate が与えられている。他方、「幸せだ」は自分の意図した通りに事態が運ぶことを必要としないため、同文脈でも用いられる。従って、「幸せだ」の定義は、(14) の happy の定義の下線部 *as I want* と、意味要素 (c) を含まないと考えられる。

第二に、肯定感の強さとそれに伴う満足度に関して、「幸せだ」は happy と異なる。(14) の happy の感情主体は自身の置かれた状況に対して、それを肯定的に評価 (= d) しているが、「幸せだ」の場合は、この評価が「とても良い」(very good) 必要がある。以下の文では、happy の日本語訳として「嬉しい」の代わりに「幸せだ」を用いると、やや不自然となる。

- (17) a. I'm happy to work with someone I know.
 知人と働く {嬉しい / ?幸せ} です。
 b. I'm happy to hear the news.
 その知らせを聞けて {嬉しい / ??幸せ} です。

上記の文では、「一緒に働くこと」や「知らせ」を聞いて生じる感情として、happy とその訳「嬉しい」が用いられる。他方、「幸せだ」が容認されるには、(17a) の働く仲間が、発話者にとって古くからの憧れである場合や、(17b) の知らせの内容が格別に良いものであるなど、より強い肯定感を導くものである必要がある。従って、「幸せだ」の感情主体は、happy よりも強い肯定的評価をしている (this is very good) と考えられる。

強い肯定感に関連して、「幸せだ」は「自身の欲求が満たされ、他には何もいらない」という満足感を伴う。(18) の明鏡国語辞典では、「幸せ」が「心が満ち足りていること」と定義されている。(19) でも、「幸せだ」の感情主体が、理想的な環境に恵まれ続けていくことで、欲求が満たされていることが想定される。

- (18) 幸運に恵まれて、心が満ち足りていること。幸福。 (明鏡国語辞典)

- (19) a. いい大学を出て、いい会社に入って幸せだね
 b. 身内の愛をいっぱいに受け、何不自由なく幸せだった (BCCWJ)

このような「幸せだ」の満足感の側面に関しては、happy よりも、むしろ satisfied に近い。従って、「幸せだ」は NSM に基づく satisfied の定義 (Wierzbicka 1999) の I can't want anything more now という意味要素を持つ、と考えられる。

上記より、happy とは異なり、「幸せだ」の感情主体は、必ずしも自分の意図通りに事態が進行している感覚を伴わず、より強い肯定の評価を下し、それに満足している。⁴

4.3 「幸せだ」の定義

4.1 での「嬉しい」「楽しい」との違い、4.2 での happy との違いに関する議論を踏まえた、本研究が提示する「幸せだ」の定義は以下である。

- (20) **Someone X was shiawaseda (at that time):**
 a. this someone thought like this (at that time):
 b. “many good things are happening to me now

⁴ 「幸せだ」の肯定感の強さは、英語 happy の意味がドイツ語やフランス語等の相当する概念より、その肯定度が低い点において特殊である、という Wierzbicka (1999) の主張を支持するものである。

- c. this is very good
- d. I can't want anything more now"
- e. because of this, this someone felt something very good
like people often feel when they think like this

4.1 で論じたように、「幸せだ」は特定の事態や対象に対する反応ではなく、自身の状況に対する一般的な評価である(=b)。また、4.2 で示したように、必ずしも自分の意図通りに事態が進行している感覚を伴わないが、その評価の肯定感は強く(=c)、満足感も伴う(=d)。従って、「幸せだ」は、「嬉しい」「楽しい」および英語 happy と共に通する意味要素を持つ一方、そのどれとも完全には一致しない。

これらの意味の違いを考慮することで、国ごとの「主観的幸福度」を比較する問題点が浮かび上がる。幸福度の主な測定手段の一つである “Taking all things together, would you say you are very happy, quite happy, or not very happy?” という質問は、「幸せ」という語を用いて日本語訳される。しかし、これらの質問が問うものは、happy と「幸せ」という異なる概念となってしまうことから、これらを順位付けすることは不可能であるはずだ。

また、直接的に happy という語を用いた質問をしない場合でも、同様な問題が生じうる。収入や犯罪数等に基づいた比較は、それぞれの国の状況の把握に有益である。しかしながら、それらのデータを happy / happiness という概念を代表するものとして扱い、異なる文化を順位付けることは、あくまで英語のプリズムを通した解釈に過ぎない。心理学の立場から「文化的幸福感」を論じる内田・萩原(2012: 28)も、幸福度を比較する調査において「欧米で策定されたものさし」で異なる文化の幸福度が測られており、「幸福の成り立ちが文化によって異なる事実が考慮されていない」ことを指摘している。

特定の言語文化に依存した調査方法は、それぞれの言語文化に属する集団が主観的に感じる幸福度の比較、という幸福度調査の本来の目的の達成を妨げかねない。Wierzbicka (2004) も主張するように、それぞれの文化における、それぞれの「幸せ(幸福)」を比較するには、NSM の提案するような、すべての言語に存在する FEEL や GOOD などの概念を用いなければならない。それによって、英語だけではなく、様々な言語における happy / happiness に相当する概念と、それらの違いを明らかにする必要がある。

5. 結語

本研究は「幸せだ」という語の生起環境を観察し、その意味を定義した。「幸せだ」は、日本語の感情形容詞「嬉しい」「楽しい」、および英語 happy と共に通する意味要素を持つ一方、それらのどの概念とも、意味は一致しない。これらの語の意味の違いを指摘することで、「幸せだ」と happy の違いを十分に考慮せず、国ごとの幸福度を比較することが、幸福度調査の本来の目的を妨げる可能性を指摘した。

参考文献

- Goddard, Cliff (2018) *Ten lectures on Natural Semantic Metalanguage: Exploring language, thought and culture using simple, translatable words*. Leiden: Brill.
- Goddard, Cliff and Anna Wierzbicka (2014) *Words and meanings: Lexical semantics across domains, languages and cultures*. Oxford: Oxford University Press.
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主觀性・主体性」 『ひつじ意味論講座 第5巻』 49-67. 東京: ひつじ書房.
- 菊地康人 (2000) 「タノシイとウレシイ」 『日本語: 意味と文法の風景』 (国広哲弥教授古稀記念論文集). 143-159. 東京: ひつじ書房.
- Kövecses, Zoltan (1991) Happiness: A definitional effort. *Metaphor and Symbolic Activity* 6 (1): 29-46.
- Lakoff, George and Zoltan Kövecses (1987) The cognitive model of anger inherent in American English. In Holland, D. N. & N. Quinn (eds.), *Cultural models in language and thought*. 195-221. Cambridge: Cambridge University Press.
- Layard, Richard (2005) *Happiness: Lessons from a new science*. New York: The Penguin Press.
- 長野ゆり (1995) 「カットスルとカットナル—感情表現の動詞の主体の人称—」 『日本語類義表現の文法(上) 単文篇』 東京: くろしお出版.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 (国立国語研究所報告 44). 東京: 秀英出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味(第1巻)』 東京: くろしお出版.
- 内田由紀子・荻原祐二 (2012) 「文化的幸福観—文化心理学的知見と将来への展望—」 『心理学評論』 55 (1) : 26-42.
- Wierzbicka, Anna (1972) *Semantic primitives*. Frankfurt: Athenaum.
- Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across languages and cultures*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, Anna (2004) 'Happiness' in cross-linguistic & cross-cultural perspective. *Daedalus* 133 (2) : 34-43.
- 山田進 (1982) 「ウレシイ・タノシイ」 國廣哲弥(編) 『ことばの意味3 - 辞書にかいてないこと』 112-120. 東京: 平凡社.

データ資料

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ)
- 明鏡国語辞典 (2011) 東京: 大修館.
- オーレックス英和辞典 (2008) 東京: 旺文社.
- プログレッシブ和英中辞典 第3版 (2002) 東京: 小学館.